

高橋五郎訳『聖福音書』をめぐって ——明治のカトリック教会についての一考察——

日 沖 直 子

1. はじめに

1865年（慶応元年）、キリスト教禁制下の横浜でカトリック教理書『聖教要理問答』¹がパリ外国宣教会（*Missions Étrangères de Paris*, 略称 MEP）のムニクー神父（またはムニクウ他、*Pierre Mounicou*, MEP 1825–1871）によって地下出版された²。1600年の *Doctrina Christiana*（どちりいなきりしたん）から実に 265 年ぶりに日本語で印刷されたこの教理書は、底本の漢籍『聖教要理』³に忠実で翻訳というよりは読み下し文に近いものであり、そこではラテン語の「*Deus*」の訳語として日本ではそれまでほとんど使われることのなかった「天主」【てんしゅ】（以下【 】内はルビ）という語が漢語のまま残された。三年後、同じくパリ外国宣教会のプティジャン神父（プチジャン他、*Bernard Thadée Petitjean*, MEP 1829–1884）により、長崎の潜伏キリシタン用語を一部採用し刊行された『聖教初学要理』にはそれに代わって「天帝」に【でうす】というルビが振られ「天主と同じ」という註が添えられたが、その後次々と刊行されたいわゆるプティジャン版教理書では漢語由来の天主が統一して用いられるようになる⁴。鈴木範久によると、日本のカトリック教会において、プロテスタント訳聖書で採用された「神」という訳語が正式に「天主」にとってかわったのは、第二次世界大戦後の 1959 年⁵だということだが、実際には「天主」と「神」の混用はそれよりもかなり早く、1887 年のプロテスタント明治元訳完成後、1890 年代初頭から進行していた。

¹ 『聖教初学要理』および『聖教要理問答』の複製と解説については高祖敏明編『本邦キリシタン布教関係資料（1865–1873 年）プティジャン版集成』雄松堂（2012）を参照。なお、本稿では旧漢字と仮名は常用漢字と仮名になおしたが、旧仮名遣いはそのまま残した。

² 人名表記と生没年については『新カトリック大事典』研究社（2009）および『日本キリスト教歴史大事典』教文館（1988）を参照した。

³ 漢籍底本との比較については上記『プティジャン版集成』「解説」28–31 ページ参照。再宣教期の教理書訳語研究としては他に中村博武『宣教と受容』思文閣出版（2000）、牧野玲子「主要邦訳「使徒信經（経）（条・條）」訳語・表記・表現上の変遷」『基督教学』23（1988）などがある。

⁴ 1869 年及び 1872 年刊『聖教初学要理』などでは天主【でうす】。

⁵ 鈴木範久「カミの訳語考」藤田富雄編『講座宗教学』第 4 巻、東京大学出版会（1977）287 ページ。

「神」がカトリック教会に浸透した過程においては、シュタイシェン神父（ステイシェン、シュタイヘン他、Michael Steichen, MEP 1857–1929）とペリ神父（Noël Péri, MEP 1865–1922）の口述、プロテスタント聖書翻訳事業の協力者、高橋五郎（吾良 1856–1935）の日本語訳により、1895 年（上巻）と 1897 年（下巻）に刊行された『聖福音書』の役割を見逃すことはできない⁶。全編を通じて「神」をデウスの訳語として採用した『聖福音書』は、キリシタン時代にさかのぼる日本のカトリック聖書翻訳の長い歴史において、初めて大司教の認可を受け出版された四福音書完訳であり、1910 年に福音書のさらなる改訳に使徒書簡と黙示録を加えて刊行され、以後カトリック訳福音書の定番となったラゲ（Emile Raguet, MEP 1854–1929）訳でも「神」はそのまま引き継がれた⁷。小論ではこの『聖福音書』成立過程と翻訳上の特徴に関する考察を軸とし、明治期の翻訳家、宗教研究者としてプロテスタントとカトリックというキリスト教 2 大派の厚い壁を超えただけでなく、日本の宗教はもとより、ユダヤ教から神智学、心霊学にいたる広範な研究を残した高橋五郎の聖書翻訳に関する業績に光をあてる。

新潟県出身、高崎で仏典や漢籍を学んでいた高橋は、植村正久（1858–1925）を通して横浜にいたアメリカ人宣教師ブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810–1880）と知り合い、1874 年ごろからブラウンやヘボン（James Curtis Hepburn, 1815–1911）の秘書や助手を務めていた⁸。新約全書の翻訳には日本人助手として松山高吉（1847–1935）らとともにおいに貢献したものの、旧約全書の翻訳に移る過程でプロテスタント翻訳委員社中（のちに聖書常置委員会。以下、翻訳委員会とする）から離れることとなる⁹。信仰上は 1876 年ごろバラ（James Hamilton Ballagh, 1832–1920）から受洗し、その後数年は教会の職務にも積極的だったようだが¹⁰、『六合雑誌』や『国民の友』などを中心とした文筆活動に力を入れ、キリスト教から宗教全般に視野を広げるようになってからは教会と距離を置いていたようである¹¹。早稲田専門学校や神田国民英学校で英語教師をつとめ、また 1893 年からは立教学校で独文学の講義を担当しており、ルクセンブルグ出身のシュタイシェンと知り合ったのはそのころだと推測される¹²。シュタイシェンが共同作業を依頼した具体的な理由や

⁶ 明治期のカトリック訳聖書の概要については、渋谷治『聖書入門』ドンボスコ（1951）183 ページ以降を参照。

⁷ ラゲ訳については河野純徳『鹿兒島における聖書翻訳』キリシタン文化研究会（1981）参照。

⁸ 高橋の履歴については受洗の有無を含め 2 次資料の記述に多少のばらつきがある。ここでは星野靖二『近代日本の宗教概念』有志舎（2012）46–47 ページを主に参照した。

⁹ プロテスタント聖書翻訳についてはさまざまな研究があるが、歴史的背景は海老澤有道『日本の聖書—聖書と訳の歴史—』新訂増補版、日本基督教団出版局（1981）および鈴木範久『聖書の日本語—翻訳の歴史—』岩波書店（2006）にまとめられている。

¹⁰ 1876 年 4 月のヘボンの書簡には以下の記述がある。「……グリーン氏は長老であり未就任有資格牧師の高橋と未就任有資格牧師の戸田（忠厚）の援助を得て、江戸の教会を維持できるでしょう。」同じく 1877 年 7 月の記述では「日曜日の日本人教会の説教は、東京から来た日本人の教職、戸田と高橋両君の援助を得ました」岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』教文館（2009 年）319、340 ページ。

¹¹ 『六合雑誌』に掲載された高橋の論文については、杉井六郎「高橋五郎小論」『六合雑誌の研究』教文館（1984）参照。

¹² 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 39』（1974）251 ページ。なお『新カトリック大辞典』によると、シュタイヘンは 1886 年から 1891 年まで東京で神学校の教師を勤め、1891 年から 1895

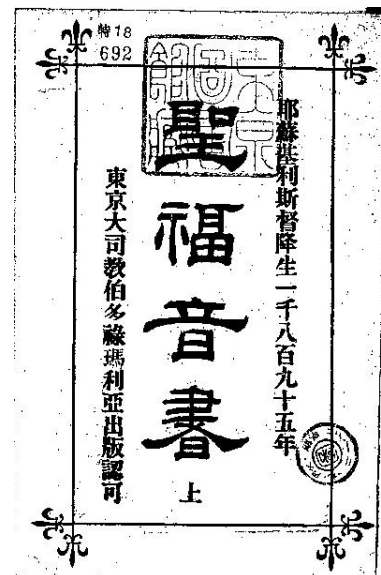
そのいきさつについては明らかではなく、高橋がカトリックに入信したという記録もない。その点に関して海老澤有道は「この『聖福音書』が、ブラウン、ヘボンの協力者であった高橋五郎の訳になることは、いかに明治前期におけるカトリックに日本人知識層がなかったかを語るものである」¹³と述べている。

しかしながら、1890年代という大きな曲がり角の時期における日本の宗教界およびキリスト教界の切迫した状況を考えると、プロテスタント聖書翻訳事業の助手から成長をとげ、翻訳家そして論客としても独立した名声を築きつつあった高橋はカトリック教会にとって魅力的な人材であり、また高橋の側にあっても、詳細な註釈付きの福音書の編纂作業は、ヘボンらのもとで学びつちかった聖書の知識を、翻訳委員会の制約の外で自らの手で世間に伝える格好の機会であったと考えられる。

小論ではまず『聖福音書』下巻、ヨハネによる福音書の冒頭部分をプロテスタント訳や高橋五郎編著『創世記註疏』（1888）との関連を軸に考察し、次に1890年代のカトリック教会の状況を高橋自身のキャリアの変遷と並行して考える。さらに1890年代後半から1900年代、カトリック信徒の雑誌『声』に掲載された論説に注目し、そこで使われた「神」の意味付けから、国家神道が国家統一と愛国の理念として強制される中でカトリック信徒たちが神道の「神」と聖書の「神」をどのように読みわけ、理解していたのかを考えたい。

2. 高橋五郎訳『聖福音書』について——ヨハネによる福音書、冒頭部分の考察——

『聖福音書』上下の原本は縦19.5 cm、えんじ色のクロス張りの洋装本で背表紙に金字で聖福音書と印字されている¹⁴。贅沢とはいえないが、一般信徒層に大切に読まれることを意識した気の利いた表装である。とびらには聖福音書の題字とともに発行年と出版を認可した東京大司教ピエール・マリア（オズーフのこと。Pierre-Marie Osouf, MEP 1829－1906）の名が漢字で記されている（右画像。以下画像はすべて近代デジタルライブラリーより転載）。上巻の奥付を見ると明治二十八年十二月十五日発行、定価が金六拾銭、発行



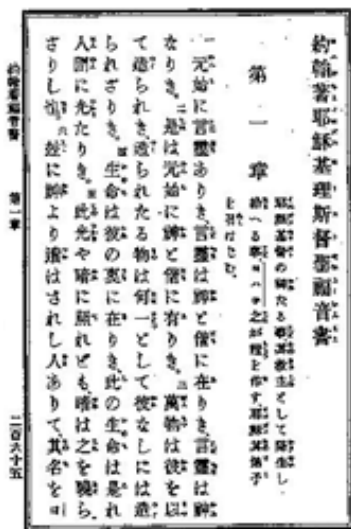
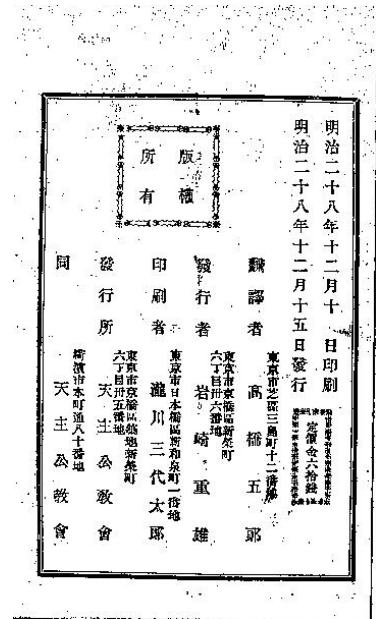
年までは横浜・静岡地区の巡回宣教師、1895年以降は静岡地区担当の宣教師であった。

¹³ 前出、海老澤、355 ページ。

¹⁴ 『聖福音書』は上下巻とも近代デジタルライブラリーで閲覧できる。<http://kindai.ndl.go.jp/>

所として東京と横浜の天主公教会、印刷者として瀧川三代太郎、発行者岩崎重雄¹⁵、翻訳者高橋五郎とあるが、口述者のシュタイシェンやペリの名は見られない。下巻についても同様である。

『聖福音書』上巻の凡例に「本聖書を和訳するには一に拉甸文の原本に本づけり」¹⁶と記されるとおり、これは福音書の原文ではなくカトリックで伝統的に使用されていたラテン語聖書 (Biblia Sacra Vulgata) の日本語訳で、おそらくラテン語文をシュタイシェンとペリがドイツ語か英語で口述し、それを高橋が日本語に翻訳したのだろう。翻訳委員会訳聖書と『聖福音書』の最も大きな違いは『聖福音書』には旧約聖書とのクロス・レファレンスを含む丁寧な註釈が各章ごとに付加されていることであり、この註釈には高橋の貢献も少なくなかったと考えられる。パリ外国宣教会の年次報告を見ると、宣教会側としては日本語福音書の刊行はシュタイシェンとペリの業績という認識だったことが明白だが¹⁷、その一方で高橋は翻訳委員会の助手として 10 年越しの研鑽を積んだ、聖書翻訳そして聖書学に関してひとかどの人物であり『聖福音書』はシュタイシェンによる聖書の語りを単に日本語化しただけにとどまらず、高橋の聖書翻訳における経験と反省、ならびに独自の聖書研究の成果が反映されているのである。



ここで『聖福音書』本文、ヨハネによる福音書（以下ヨハネ伝）の冒頭を見てみよう。「約翰著耶穌基理斯督聖福音書」は下巻の 265 ページからはじまっている。第一章と記された下に章の概略が記されている。有名な冒頭部分はここでは、

元始【げんし】に言霊【ことだま】ありき、言霊【ことだま】は神【かみ】と偕【とも】に在【あ】りき、言霊【ことだま】は神【かみ】なりき。

と訳されている。ラテン語の「神」すなわち「デウス」の

¹⁵ 海老澤によると、岩崎は築地教会の隣に住んでおり、他の教理書の発行者でもあったようである。前出、355 ページ。

¹⁶ 『聖福音書』上巻、高橋五郎訳、天主公教会 (1895) 1 ページ。

¹⁷ 1898 年の年次報告に「ペリ師と一緒に、最近聖福音の日本語訳をしたステイシェン氏は……」とある。『パリ外国宣教会年次報告 II (1894~1901)』松村菅和・女子カルメル修道会訳、聖母の騎士社 (1997) 163 ページ。

訳語は「天主」ではなく「神」で統一されており、これは最初からプロテスタント訳になじんでいた高橋にとっては自然なことであつたのであろう。しかし、一方でイエスの名は「耶穌【イエズス】」とし、1895 年刊行の『公教要理』の表記に準じている¹⁸。「神」の語について高橋は、キリスト教徒が「神」あるいは「真神」を全知全能の造物主であると理解しているのに対し、神道における「神」はもともと「加美」あるいは「迦微」で、八百万千万の数限りない御霊のことであると区別していた。1881 年に刊行された『諸教便覧』中の神道論で高橋は国学者の言葉を引き、

何ニマレ尋常【ヨノツ子】ナラヌ優レタル徳【コト】ノ有テ畏キ者ヲ迦微トハ言フナリ
抑モ迦微トハ斯ノ如ク種々ニテ貴キモアリ賤キモアリ強キモアリ弱キモアリ善キモアリ
悪キモ有リ……¹⁹

と解説している。

また注目されるのがギリシャ語の「ロゴス」の訳語としての「言霊」であるが、これは、奥野昌綱（1823–1910）が版木の下書を書き、地下出版されたことで知られる 1872 年刊行のヘボン・ブラウン訳ヨハネ伝に登場した語で、その後の翻訳委員会版では「ことば」「言【ことば】」または「道【ことば】」に変わっている。海老澤の見解では 1872 年版はヘボンとブラウンの訳業の中で最も早く出版されたヨハネ伝であるにもかかわらず漢籍聖書への依存が比較的少ない点が特に注目される。この版ではブラウンによる訳が基調となり、奥野昌綱をはじめとする翻訳事業最初期の日本人助手の貢献も少なくなかったのではないかと推測されている²⁰。

つまり、高橋訳では 20 年ぶりに漢籍への依存が比較的少ない訳に立ち返り「神」をプロテスタント訳から継承しつつ「言霊」という国学色の強い語を復活させたことになるが、高橋にはロゴスの訳は言霊のほうが適切であるという確信があつたようで、章末の註釈に「霊在りて活ける言語と云ふ意味ある」「言霊」は「神の活ける知識」であるロゴスの適切な訳であると説明している²¹。

ヨハネ伝冒頭の「λόγος (logos)」は、ラテン語聖書では Verbum、欽定訳聖書では大文字ではじまる the Word である。漢訳聖書の「道」や、現在の新共同訳で使われる「言」もそれに準じ、福音記者が記すロゴスという語の中にあるヘブライズム的要素とヘレニズム的

¹⁸ 1895 年刊『公教要理』は司教会議において 4 教区の指定書とされたものである。前出、牧野、3 ページ。それ以前は「ぜすす」または「ぜずす」が多かった。

¹⁹ 高橋吾良『諸教便覧』(1881) 14 ページ。復刻版、島藺進他編『宗教学の形成過程・シリーズ日本の宗教学 4』第三巻、クレス出版（2006）を参照した。以下、引用中のルビは必要と思われるところのみ残した。

²⁰ 前出、海老澤、175 ページ。ヨハネ伝成立の過程にしては同書 180–183 ページも参照。

²¹ 『聖福音書』下巻、高橋五郎訳、天主公教会（1897）、275 ページ。なお、その後 1910 年刊のラゲ訳新約聖書では「言霊」は「御言【みことば】」にかわり「みことば」が現在のフランシスコ会訳聖書にまで引き継がれている。



要素が複雑にからみあったものを²²、それぞれの語がもつ象徴的イメージを通して表現しようとする、困難かつ翻訳者にとっては実にやりがいのある試みである。旧約聖書の伝統では神のことばには創造の力があり、また、ギリシャ哲学においてロゴスは宇宙の根底にある原理または理性であった。和訳聖書の歴史の中では 1837 年のギュツラフ (Karl Friedrich August Gützlaff, 1803–1851) 訳「ハジマリニ カシコイモノゴザル」や、1873 年のベッテルハイム (Bernard Jean Bettelheim, 1811–1870) 訳の「はじめにかしこいものあり」は、ロゴスを理性や知識だと解釈しているのが明らかであるが、高橋が主張する「活

ける知識」「活ける言語」に注目した「言霊」という訳は神のことばの旧約的解釈「それが語られることによって出来事として生起する力」²³を示唆しており、その点で、ギュツラフ訳やベッテルハイム訳がロゴスをギリシャ的に解釈しているのに対して、1872 年へボン・ブラウン版と高橋訳はユダヤ的な解釈を示していると言える²⁴。

実は、高橋は『聖福音書』刊行の 7 年前、1888 年に『創世記註疏』という書を東京聖教書類会社から刊行しており、ヘブライズムの伝統については既に相当の知識を有していた²⁵。本の表紙には高橋五郎編著とあり、引用される創世記の本文は翻訳委員会訳の旧約全書に準じている。この書で高橋は創世記第 1 章 3 節「神光あれと言ひたまひければ光ありき」において神の言葉の力について解説、ヨハネ伝第 1 章に言及し「此の句は神が御言【おことば】の権能【ちから】を以てまづ光明【ひかり】を造り出したまひしを謂ふものなるが」²⁶ 翻訳委員会訳では神の力の偉大さが伝わらない、よりよい訳は「神言ひたまひけらく、光あれと、即【すなわ】ち光ありき」ではないかと提案している。続いて高橋は「詩篇第三百十三首六節²⁷に」、

「諸々の天はエホバの御言によりて成り」と云ひ又同九節に「そはエホバ言ひたまへば成り、おほせたまへば立るがゆえなり」といふが如きも皆この創世説にもとづきて作れる文句なるべし、約翰伝福音書第一章三節にはキリスト、イエスを「ことば」[ロゴス]と称へ「萬の物は之によりて造らる」と記したり、²⁸ ([]は原文のカッコ)

²² ヨハネによる福音書第一章の「ロゴス」の解釈については、R.ブルトマン『ヨハネの福音書』杉原助訳 日本基督教団出版局 (2005) 59–62 ページ、他を参照した。

²³ 前出、ブルトマン、61 ページ。

²⁴ 1891 年警醒社刊、田村直臣『新約註釈全書約翰伝』にもロゴスの訳に関する解説があり興味深い。田村はロゴスを「我ら人の言葉が他人に向けて我人の思想を表す如くイエスによりて神は其思想及び条を世に表したまふ」と書いている。同書 21–22 ページ。

²⁵ 近代デジタルライブラリーで閲覧可能。カバラへの言及は 35 ページ。

²⁶ 高橋五郎編著『創世記註疏』東京聖教書類会社 (1888) 45 ページ。

²⁷ 33 章 6 節のこと。

と述べている。文中にエホバとあるのは、後述するように当時の和訳旧約聖書ではヘブライ語の「אלהים (Elohim)」と「יהוה (Yahweh)」をそれぞれ「神」と「エホバ」に区別していたためである²⁹。

上記の引用部分で高橋が主張する翻訳委員会の「神光あれと言ひたまひければ光ありき」という訳は「神言ひたまひけらく、光あれと、すなわち光ありき」としたほうがよいのではないかという提案については、文章の力強さへのこだわりもさることながら、ドラマチックな効果と「～たまひけらく」という古事記など日本古代の文書で読者がなじみのある言い回しを彼が欲したのではないかと推察される。また、翻訳委員会で参考書として使用されていたデリッチ (Franz Delitzsch, 1813–1890) の旧約聖書註解、創世記第 1 章の第 2 節から 5 節の解説には、上記と同様に詩篇とヨハネ伝のロゴスへの言及がある。高橋が欧米の参考書を読み、そこで得た知識に自身の考察を加えこの註解書を著したことがわかる³⁰。また『創世記註疏』と同じ年に日本語で刊行されたラールネデ (ラーネッド Dwight Whitney Learned, 1848–1943) のヨハネ伝註釈にも、ロゴスは旧約聖書から来た言葉であるという説明があり、詩編 33 章 6 節が引照されている³¹。

この例にとどまらず『創世記註疏』全体を通して明らかなのは、当時の聖書学界で主流だった創世記の解釈がきちんと押さえられていることである。また、翻訳委員会が使用していた「ランゲ」 (Johann Peter Lange, 1802–1884) や「デリチ」 (上記 Delitzsch のこと) のみならず、いわゆるラビ聖書の註解で引用される中世のユダヤ学者「アベン・エズラ」 (Abraham Ben Meir Ibn Ezra, 1089?–1167?) や「ラシ」 (Rabbi Shlomo Yitzchaki, 1040–1105) さらには「密教派 (カバリズム)」つまりカバラの伝統による聖書解釈への言及があり、そこに集められた情報の幅広さに驚かされる³²。ラビ註解についてはルターがラテン語版を参照引用していたことが知られており³³、ラビ聖書の英訳³⁴を翻訳委員会で使用しそれを高橋が学んでいたとしても不思議ではない。ただカバラについての言及は宣教師から学んだものとは考えにくく、むしろ『神道新論』と『仏道新論』 (ともに 1880) に続いて『諸教便覧』を著し³⁵、宗教学者として世に知られつつあった高橋が自身の調査研究で集めた知識をこの創世記註解書に反映させたのであろう。ただ、当時聖書解釈学において大

²⁸ 前出、高橋編著、46 ページ。

²⁹ 伝統的に Yahweh は the Lord (主) と訳される。翻訳委員会の旧約全書 (1888) では「神」と「エホバ神」として訳し分けられている。

³⁰ James Martin による英語訳 (1949) を参照した。C. F. Keil and F. Delitzsch, *Commentary on the Old Testament in Ten Volumes*, vol. 1, reprint (Grand Rapids: William B. Eerdmans, 1986), 49 ページ。

³¹ ラールネデ、速水琢庵『約翰伝註釈』福音社 (1888) 2 ページ。

³² ラビ聖書など旧約聖書の註解書の伝統については黒川知文氏から御教示を賜った。

³³ 土岐健治、川島第二郎「聖書翻訳史における元訳・口語訳・新共同訳」『一橋大学研究年報・人文科学研究』27 (1988) 54–55 ページ。

³⁴ Rabbinic Bible の英訳で現在定本とされる Jewish Publication Society のものは 1917 年が初版。それ以前の英訳としては 1853 年と 1857 年に刊行された Isaac Leeser translation がある。

³⁵ 『神道新論』『仏道新論』ともに前出、島薮他編、に復刻されている。

問題になっていた、いわゆる「新神学」や科学的な聖書解釈への傾倒は見られず³⁶、むしろ高橋自身がのちに神秘主義にのめりこんでいったことの先駆けのようなものが確認できる。

高橋には旧約全書の訳出事業に直接関わることができなかったことから翻訳委員会に感情的なわだかまりがあり³⁷『創世記註疏』においても外国人宣教師と教会主導の委員会にはない独自の広い視点で聖書を解説してやろうという気概があったと思われる。また彼は当時の和訳聖書や教理書の一大問題として漢訳への依存がはなはだしかった点について³⁸、旧約全書の翻訳完成直後いちやく委員会を批判している。

……然りと雖も今日の訳書決して完全なる者に非ず、今此に挙たる古訳は支那訳に本づいて作れる者なるが今日の新約全書も亦支那訳に由りて成れる者なり、此事に於ては唯に五十歩百歩の差あるを見る而已、蓋し此新約書を訳するに當りて一種奇代なる事情の存するありて蓋く支那訳に模倣して之を訳出せり。³⁹

当時は言文一致運動など日本語の書き言葉が揺れ動いていた時代であり、高橋の問題意識は時機にかなったものであった。ここで興味深いのは、植村正久が『聖福音書』の刊行後、高橋の訳業に好意的な評価を与えている点である。植村によると『聖福音書』は文体が力強くしかも当時一般の日本語に近いものであった。

ラテン訳文を根拠として訳出せるもの故、多くの点に於て遺憾多きは固より言ふまでもなし。然れども文字上より公平に之を観察すれば、高橋氏の訳文は彼の聖書会社の翻訳せるものに比して聖書の精神を伝へ、文体の氣力を存し、今日の日本語と径庭する所少きなど遙かに勝れるを覚ゆ。⁴⁰

ただ、そうではあっても『聖福音書』が翻訳委員会訳に負うところが大きいことは一目瞭然で、漢訳聖書への依存から「卒業」し日本語としてよりこなれた聖書訳をみるにはいずれにしても大正改訳の完成をまたなければならず、高橋の訳業は明治元訳から大正改訳への移行の過程における模索の成果と評価するのが妥当であろう。たとえば、現在「はじめに〜ありき」という言い回しの出所としてしばしば例にあげられる文語訳ヨハネ伝の冒頭に過去時

³⁶ 1880年代、同志社での新神学をめぐる論争については塩野和夫「ラーネッド書簡に見る新約聖書の初期注解書」『来日アメリカ宣教師』同志社大学人文科学研究所（1999）参照。

³⁷ 聖書翻訳事業の内部事情については、佐波亘編『植村正久とその時代』第4巻、教文館（1976）に資料がまとめて紹介されている。

³⁸ 漢訳聖書と委員会訳についての研究は森岡健二「委員会和訳聖書の文体と漢訳聖書」『国際基督教大学学報Ⅳ—Bキリスト教と文化』2（1966）を参照。ヨハネ伝1章1-5節の漢和対照は15-18ページ。

³⁹ 「基督教の聖書翻訳完成す」『国民の友』17号（1888）。

⁴⁰ 『福音新報』明治29年（1896）4月27日号

制をあらわす「ありき」が現れたのは管見では『聖福音書』が最初である。ここでは文法には几帳面だったといわれる高橋がラテン文の *In principio erat Verbum* の時制を正確に訳そうとした結果がうかがわれよう。

3. 『聖福音書』成立時の背景

前述のように高橋が欧米の注釈書を読み、独自の聖書研究を本格的に開始したのは、新約全書完成後、翻訳委員会の旧約翻訳事業から委員会側との軋轢により離れたことが一因だったと考えられる。1895 年前後は一致教会に属していたということだが⁴¹、松山高吉をはじめ翻訳委員会のメンバーとの感情的な摩擦については、彼がそのころ必ずしも「教会人ではなかった」⁴²ことも関連していたであろう。このような状況に加え、高橋がいわゆる「内村鑑三不敬事件」にからみ、井上哲次郎に派手な論戦を挑んでいたことも、パリ外国宣教会の宣教師たちが彼の業績と能力に注目した要因だったと考えられる。

「内村不敬事件」つまり、第一高等中学校の教育勅語奉読式において内村鑑三（1861－1930）が「不敬」な態度をとったと糾弾され職を去った事件は 1891 年 1 月にはじまった。そしてその問題について当時帝国大学の教授であった井上哲次郎（1856－1944）が、特にキリスト教を非国家主義として非難する書『教育ト宗教ノ衝突』を刊行したのは、キリスト教側の反駁をうけ論争が盛り上がった 2 年後の 1893 年 4 月のことであった⁴³。井上の論文が『教育時論』に連載されはじめたのは同年 1 月からだが、高橋は同年 3 月にはすでに『国民の友』に「偽哲学者の大僻論」を載せて反論、その後井上の『教育ト宗教ノ衝突』の刊行をうけて、論文や記事の形で論戦が続いた。今日客観的に眺めるとこれらは「感情的な揚げ足取りの面に多くの文字が費やされ」「泥仕合」⁴⁴の様相が強いが、当時の状況の中では、この論戦により高橋は井上に真っ向から挑戦する知識人として、またキリスト教界きってのアポロジストとして大いに世間の注目を集めたのであった。後に小崎弘道は『基督教世界』で井上に対する高橋の反撃を回想し「当時基督信徒は勿論一般の公衆も曲学阿世官学の弊風の忌憚なき排撃を見て痛快に感じたのである」⁴⁵と述べている。

ただ、高橋の弁駁の内実はキリスト教的理念あるいはキリスト教信仰の国体にたいする超越性を主張するものではなく、キリスト教は国体に矛盾しないという弁解に近いものであった。キリスト教の道徳「ピエタス」には信心だけでなく忠孝が含まれ⁴⁶、またキリスト教徒

⁴¹ 前出、海老澤、355 ページ。

⁴² 前出、昭和女子大学近代文学研究室、286 ページ。

⁴³ 内村不敬事件関連の文献情報については、鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集』第 IV 期の『別冊解説・解題・年表・エッセイ』を参照した。日本図書センター（2004）

⁴⁴ 前出、鈴木監修、23 ページ。

⁴⁵ 前出、佐波編、164 ページ。

⁴⁶ 高橋のピエタスについては、鈴木範久『明治宗教思潮の研究』東京大学出版会（1979）122－130 ページ参照。ここには高橋と松山高吉との関係についても考察されている。

は非キリスト教徒以上に愛国者であると高橋は主張し、したがって井上が論じるようにキリスト教が非国家主義的で忠君愛国を重んじないというのは間違いであるとした。高橋の反論の中でキリスト教徒が愛国的であるという主張の強さは際立っている。彼は『排為哲学論』（1893）で次のように述べている。

（キリスト教徒は）万物の霊たる身を以て木石禽獣を礼拝するの非なるを知るものなり（中略）然れども彼らは既に道義の根本たる天を畏れ、衆徳の淵源たる神を敬ふ此心即ち君に対しては忠となる、父母に対しては孝となる、国に対しては愛国心となる故に率鎌倉といふときには「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍」真先に大君の馬前に打死せん者、一旦緩急ある時には第一に国難に殉せん者は必らず彼等なるべし……⁴⁷

キリスト教徒は誰にもまして君に対して忠である、つまり日本の状況においては天皇に忠誠であるという主張は、少なくとも 1893 年当時の日本のプロテスタント教会にとっては違和感があり⁴⁸、その点、伝統的に世襲国王家の権力に逆らわずしてその権威を維持してきたカトリック教会のほうにより親和性のある考え方であったであろう。

井上の『教育ト宗教ノ衝突』は日本のキリスト教界全体に大きな打撃を与え、各教会はさまざまな反応そして反論を試みた。カトリック教会についていえば、まず、リギョール神父（リギョル、リニョール他。François A. D. Ligneul, MEP, 1847–1922）と前田長太（1867–1939）⁴⁹が 1893 年 9 月に『宗教ト国家前編 一名教育と宗教の衝突論の反駁』という書によって反論を試みるが、これが発行日に先立って内務省の告示により「安寧秩序ヲ妨害スルモノ」として発売禁止となり関係者にショックを与えた⁵⁰。発禁処分の具体的な根拠は示されていないが、鈴木範久によると、問題とされたのは「試みに思へ、日本の臣民中少しく知識ある者は、誰か天照大神を以て最大の神となす者かある」という部分であることが考えられる⁵¹。

1893 年のパリ外国宣教会年次報告、パリ神学校長あてのオズーフ大司教の手紙（1893 年 10 月 2 日付）には、井上哲次郎と愛国主義をめぐる多くの事が語られている。まず、井上

⁴⁷ 高橋五郎『排為哲学論』民友社（1893）25–26 ページ。鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集』25 巻、日本図書センター（2004）に収録。

⁴⁸ 1889 年、宗教と教育論争に先立って発表された小崎弘道の『基督教ト国家』では、キリスト教は国家を愛し君に忠誠を尽くす教えであるが、良心に反するものにまで黙従はしない、とした。プロテスタント教会でもその後、愛国論はさまざまな形で展開する。前出、鈴木監修『別冊解説・解題・年表・エッセイ』23–27 ページ他。

⁴⁹ 高橋と同じ新潟県の出身である前田は、1894 年カトリック司祭となるが、結婚により司祭職から離れ、慶應義塾大学で教鞭をとった。リニョールの著作の多くは前田の訳によるもの。前出、鈴木監修、32 ページ。

⁵⁰ 発禁処分にもかかわらず、同書の刊本を立教大学が所蔵している。『近代日本キリスト教名著選集』27 巻、日本図書センター（2004）に収録。また、海老沢有道「リギョールとその著『宗教と国家』『聖心女子大学論叢』14（1960）も参照のこと。

⁵¹ 前出、鈴木監修、32–33 ページ。

の主張の要約があり（「井上氏に依ると、日本国民の真の宗教は愛国主義であって、その道義は主君への忠誠と良心への従順にある……」⁵²）続いてカトリック宣教、ひいては教会の生き残りにとっての出版物の重要性が強調されている。

この挑発的な（井上の）本を読んでいると読者の心は著者につられて夢中になり、キリスト教への敵対心がかきたてられる。「これこそ敵だ！これこそ敵だ！」と。これに日本人特有の心情も手伝って、この本が驚異的な成功を収めた事が納得される。（中略）

この様な状況にあって明らかな事は、普通、神と善業の側から与えられる授けの他に、我々に残された防御と布教の為の主要な、多分これしかない唯一の手段は之また報道だという事である。最も重要な仕事は、今日報道機関が働きかけている社会のあらゆる層の人々に広く読まれるような新聞、パンフレット、本、の著作、出版であるということも明白だ。⁵³

続いて報告では、仏教関係の新聞や書籍は毎年多数が刊行され、プロテスタント系の新聞や雑誌は 22 種、プロテスタント系出版社の目録にはありとあらゆる版と価格の出版物が 600 にのぼるが「我々カトリックはこの敵方の全勢力を前にして一体何を持っているのか」⁵⁴と出版事業でプロテスタントに大きく後れをとったことを嘆いている。発禁処分顛末はこの報告の最後に語られる。

私はこの報告を、締め括るにあたり冒頭に書いた井上教授の本の件について、思いがけない巻き返しがあった事を述べたいと思う。リニョール師は教授のキリスト教非難に応戦する著作の第一巻を書き上げて印刷させた。規則通り書店での発売の前に内務省に二冊を届け出た。ところが、明日が発売日という日になって内務省の決定によりこの本が人心[社会の平和]を乱す危険有りとして発売禁止になったのである！（中略）

しかし、これ等一切を許されたみ摂理にはきとお考えがあったのであろう。官報に続いて、他の新聞も多くが、検閲の採決文を転載した。その結果大体誰も知らないリニョール師の本に早くも大きな興味が寄せられるようになった。方々からこの本を求めたいと言ってくるのだがもちろん誰にも渡せない。しかし、もしも神が許されるなら主に政府の感情を害した点を削除し、いつの日か他の表題で井上博士の貧弱な論文を徹底的に再検討することが出来るだろう。⁵⁵

⁵² 『パリ外国宣教会年次報告 I (1846～1893)』松村菅和・女子カルメル修道会訳、聖母の騎士社（1996）311 ページ。

⁵³ 同上、312 ページ。

⁵⁴ 同上。

⁵⁵ 同上、322 ページ。

このように、井上のキリスト教批判をめぐる一連の出来事からオズーフ大司教は、日本の宣教での出版の重要性を深く認識し、それと同時に教会側からの反論は井上の論文そのものに対するものにとどめ、発禁処分をうけた書の中で「政府の感情を害した点は削除」してさらなる布教宣伝につとめようと考えたのである。

1890年代半ば以降、パリ外国宣教会の年次報告では出版事業の進展に関する報告が目につくようになる。1898年分には福音書の日本語訳の刊行についてペリとシュタイシェンの功績として記され、また、高橋が編集長をつとめていたカトリック雑誌『天地人』の発刊が誇らしげに報告されている⁵⁶。ただ、リギョールの協力者として前田の名前は宣教会の報告に見られるものの、『聖福音書』の翻訳者であり『天地人』の編集長でもあった高橋の名はどこにも見当たらない。

活発な執筆活動が続けていたリギョールの著書には哲学書の他、井上への反論が出発点となった国家や愛国心に関するものがいくつかある⁵⁷。1897年、リギョールと前田が思いも新たに著した『愛国の真理』では、シャルルマーニュ大帝やルイ9世の例をあげヨーロッパの「開明の国」では愛国忠勇の豪傑とキリスト教徒であることが対の熟語となって武人の特質を示しているのだとうたっている⁵⁸。日清戦争の結果を正当化するような記述も見られる。そこでは、キリスト教の博愛主義は「先づ故国を愛して次に万国に及ぶ」⁵⁹ものであり、

請ふ往年の日清戦争を看よ、日本帝国の臣民が清国の敵に対して、斯く寛大の恩遇に出でたるは、是れ古の愛国心の散渙したる為なるか、却て是れ古の愛国心の一層文明的となりたるの明証にはあらずや、然り而して我基督公教の愛国心は即ち是れ毫も此愛国心に外ならざるなり……⁶⁰

と論じている。カトリック教会をめぐるこれらの時代背景を考えると、発禁でうけた打撃から立ち直り、またプロテスタントや仏教界の出版事業に後れをとった分を取り戻そうと奮闘していたオズーフらが、いちはやく井上に反撃してキリスト教徒は愛国者であると主張、世間の注目を集めた高橋に出版事業の協力者として目を付けたのは自然な流れであったとも言える。年次報告書に高橋の名があがっていないのは、彼があくまで外部協力者にとどまりカトリックに改宗しなかったことが関係しているのかもしれない。

⁵⁶ 前出、『パリ外国宣教会年次報告Ⅱ（1894～1901）』163ページ。

⁵⁷ リギョールの文筆活動については、山梨淳「近代日本におけるリギョール神父の出版活動とその反響」『カトリック研究』79（2010）参照。

⁵⁸ リギョール、前田長太『愛国の真理』文海堂（1897）29ページ。

⁵⁹ 同上、26ページ。

⁶⁰ 同上、30ページ。

ちなみにリギョール・前田の『愛国の真理』では「天主」という語は見当たらず、その代わりに「上帝」「天父」と「神」が使われている。教理書以外の書籍では必ずしも「天主」に統一されていなかったことを示す一例である。次節では 1890 年代以降のカトリック教会での「デウス」を表す語について概観する。

4. 1890—1910 年代における「天主」と「神」の混用

セム系一神教では一般に、全知全能の創造主である神は人間の通常理解を超えた存在である。したがってその名は、時には口にすることが禁じられ、時には全ての言語において共通とされ、また時には、どの言葉をもっても言い表せず無限に存在する。キリスト教の宣教においては、カトリックとプロテスタント教会双方で延々と続いた中国の「神の訳語論争」は特に有名である。日本の近世、きりしたん時代の宣教ではラテン語のデウスに統一されていた印象があるが、デウスの語の表記方法は多様であったし、また、いわゆる羅葡日辞書(1595)⁶¹では、Deus の訳語として *tentō*, *tenxu*, *tenson*, *tentei* の 4 つ⁶²があげられている。

鈴木範久によると、日本のプロテスタント宣教で訳語「神」がすんなりとうけ入れられた理由としては(1) 中国で神を主張したアメリカ系宣教師の影響(2) 日本の神には「カミ」の総称化の要素がある(3) 日本の宗教構造では「神」によって象徴される存在の内容がキリスト教ほど重要ではなかった(4) カトリックの「天主」との混同をさけるため、などがあげられる⁶³。しかしながら、これはプロテスタントの「神」とカトリックの「天主」に厳密に分けられ、それぞれ統一されていたということではない。鈴木氏の『七一雑報』1 号(1885)から 30 号に関する調査によると、そこでは、神、天主、をはじめ真神、上帝、天父、造物主、など様々な読み方を合わせると、16 種類もの呼び名が使われているということである。⁶⁴

ここで、カトリック雑誌『声』において高橋訳の『聖福音書』が刊行された 1895 年から 1910 年代にかけての記事にどのような神の呼び名が使われていたかを概観したい。『声』は 1891 年創刊、当初は京都河原町三条の木鐸館が発行、その後東京の神田三才社にうつり、第二次大戦中は休刊していたが、1946 年大阪で復刊、2002 年まで継続して刊行されていたカトリック信徒を対象とした雑誌である。高橋が編集に関わっていた『天地人』が政治社会および文化教養に関する記事を主に掲載し、教会の外に向けて発信していたのとは異なり『声』は信者の教化とカトリックの霊性に関する記事に力を入れ、司教の人事など教会内部の事務的情報も掲載して信者のニュース・レターのような様相もおびていた⁶⁵。

⁶¹ *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* ... (Amakusa, 1595). 勉誠社復刻版(1979)を参照した。

⁶² 1870 年にパリ外国宣教会によって復刻、改訂出版された羅日辞書では Deus の訳語は *tenxu* と *tentei* のみ。

⁶³ 前出、鈴木、「カミの訳語考」、324 ページ。

⁶⁴ 同上、315—316 ページ。

1895 年当時『声』の記事に見られるのはもっぱら「天主」であるが、第 103 号（1895 年 8 月 1 日）には「神」を使った論文が一件確認できる。実は 1890 年に福岡公教会が発行したラゲの「基督の復活」という冊子では高橋訳に先立って「天主」のかわりに「神」が使われ、また 1892 年に長崎天主堂から刊行された長塩軍治の『旧新両約史略』では上巻の叙言に「本書に約と云へるは神即ち天主が人類に対して結び給へる……」という一文が見られる⁶⁵。プロテスタント聖書翻訳事業の完成以降「神」が次第に浸透し、カトリック教会にも影響を与えていた様子がうかがわれるところである。1899 年には『声』上で「神と人についての神学的研究」という長期連載があるが、論文中には「天主」が一貫して使われている。「神」が増えてくるのは 1900 年代後半であるが、ラゲ訳刊行後の 1910 年代になると、もはや記事や論文中で「神」を使用することが珍しくない状況となってくる。

1902 年『声』272 号と 273 号に掲載された道田高吉⁶⁷の論評「日本国家の危機を論じて本邦国民に訴ふ」では「神」を「天主」の代わりに使用していることに加え、プロテスタント教会で使われていた「真神」の語が確認できる。この論評で道田は、天皇を中心とした日本の国体を攻撃するのは無神論者であるとし「我が皇統の大権」の出所は「人間以上の真神に在りと言はざるを得ず。」「吾輩は日本大権の出所は全然人間以上の神霊在りと断定するを以て日本国家の絶対的真理と為すなり」「然ば日本皇室と神との間は甚だ密接して瞬時も相離るべからざる、大関係の存する有て、斯関係断絶するの日は必ず日本国家滅亡の日たるや固より言をまだず」⁶⁸と主張する。同論の続編ではさらに無神論者を批判する論調が強められている。

（無神論者は）日本大権は神より出づとの大真理を根底より破滅せむと欲せり、抑も我が天授的申請なる大権の特立は帝国憲法が認るところならずや、然るに今、彼輩は大に無神を主張して、其神聖たり天授たる所以の理を滅却し、其特立する所以の本を切断す、是独我大権の罪人たる而已ならず、抑亦帝国憲法の罪人たり。⁶⁹

上記引用など、前後のコンテクストを離れて読むとキリスト教者の発言というよりは、国家神道の立場からの無神論者への攻撃と勘違いしそうになる。しかし言うまでもなく、論評の中で「真神」または「神」とあるのは道田にとっては神道のカミではなく、デウスである。つまり、国家神道による皇統は「神＝カミ」に起源するという主張に関して、その起源を「真神＝デウス」とすることにより、帝国憲法が「天皇は神聖にして犯すべからず」「天皇は国の元首にして統治権を総攬す」としたことを王権神授説的発想でキリスト教の教理に矛

⁶⁵ ちなみに、高橋訳『聖福音書』刊行のニュースや広告が『声』には一切見られない。『天地人』には十字屋刊行として『聖福音書』の広告が掲載されている。

⁶⁶ 「基督の復活」『旧新両約史略』ともに上智大学キリシタン文庫本を参照した。

⁶⁷ 道田は当時、長崎五島地方の司教であった。

⁶⁸ 『声』第 272 号（1902）6 ページ。引用中の下線筆者。

⁶⁹ 『声』第 273 号（1902）7 ページ。

盾しないかのように読み替えているのである。

ところで、旧約聖書における神の呼び名の多彩さについて高橋五郎は『創世記註疏』冒頭の概論で「エロヒム記者及びエホバ記者」や「旧約書に見ゆる神の種々の名」という節を設け「エロヒム (Elohim)」と「エホバ (Yahweh)」の区別を明らかにすることに多くの紙面をさいている⁷⁰。高橋が紹介しているのは Elohim が造物主であり天地の主であるのに対し、Yahweh はイスラエルの守護神で救い主であるという説であるが、Elohim が「エロア (eloah)」の複数形だと考えられることを指摘し「而してまた之を複数として用いる時は諸の神をも指し、又独一の真神をも指す、唯真神を指す時には単数の動詞を用ふるを常として之を区別せり」⁷¹と述べ、そして独一でなければならない神が複数形になっていることについては「古来議論解説區々【まちまち】にして山の如し」とし、中世スコラ派の説とユダヤの学者の説を事細かに紹介している⁷²。さらに、高橋は 1882 年に著した『諸教便覧』で「真神」は唯一無極の造物主を指し、イスラーム（「回教」）が敬う神も「真神」だと書いている⁷³。

明治期のプロテスタント教会において「真神」の語は、日本のカミあるいは諸国の神々と、一神教の造物主である神を区別する際に使われることがあった。植村正久は「神」のかわりに適宜「真神【まことのかみ】」や「上帝【かみ】」を用いたことがあり⁷⁴、鈴木によると『七一雑報』の記事にも日本のカミには「神」が、そしてキリスト教の God には「真神」が、両者をはっきりと区別する目的で使われている例があるとのことである⁷⁵。鈴木は教育勅語の発布までは日本のカミはもともと神々であったとするが、それが「日本の神々の中から、しだいに一つの神が絶対的性格を強く帯びるにしたがって、それとプロテスタントの真神との間の関係は一触即発の状態になっていった」それが「不敬事件」で明るみに出た、と考察している⁷⁶。

ここで『声』に掲載された道田の論評をみると、そこでは「真神（＝デウス）」と「カミ（＝日本の神々）」の対立という構図を超え、カミと真神が入れ替わり、真神が天皇に王権を与えたということになっている。道田がことに訴えているのは無神論者や社会主義者が国体を破壊するという警告であり、真神から権威を与えられた天皇および皇統が破壊勢力におびやかされる時、カトリック信徒を含む国民は天皇を全力で守るべきだというのである。ただ、外国人宣教師たちの側では道田の心情とはかなり異なり、皇室に従順に仕えることによ

⁷⁰ 前出、高橋編著、20 ページ以降。

⁷¹ 同上、24－25 ページ。

⁷² 同上、28－29 ページ。スコラ学派の説は複数形が三位一体を表すというもので、一般にキリスト教会では現在もそのように説明される。高橋があげるユダヤの学者の説とは、天使や諸々の神が真神につながっている、あるいは、全知全能の神の偉大さが複数形で表されているというものである。

⁷³ 高橋吾良『諸教便覧』十字屋（1881）91、102 ページ。高橋の真神観については、前出、星野、58－61 ページに興味深い考察がある。

⁷⁴ 前出、鈴木、「カミの訳語考」、315 ページ。

⁷⁵ 同上、318 ページ。

⁷⁶ 同上、319 ページ。

って社会道德の保持に協力し、また無神論者、唯物論者が社会に与える影響を警戒しつつも、天皇が神聖にして守られるべきだという考えにはいたらなかった。1912年のパリ外国宣教会年次報告には下のようにつづられている。

権威の神的起源を説くことを喜ぶのは、たぶん第一に我らであるべきであろう。しかし、神社や神官や宗教的祈り、迷信的な儀礼や義務として科せられる公的祭などをもつ男神や女神は、我らが礼拝する神ではない。この神道の礼拝は、市民的礼儀作法にすぎない、純粹に礼儀にすぎない、したがって憲法によって宣布された良心の自由に触れるものはないと信じさせようとするのだろうか？⁷⁷

外国人宣教師にとってはカミとはあくまで日本の神々のことであり、悪魔の手先であり邪神であるカミとデウスとの間に接点はあり得なかった。しかし、明治の日本人キリスト者にとっては、それぞれの内的信仰の探求、深まりの中で両者の対立からカミ否定の形をとるにせよ、カミをデウスに読み替えることになるにせよ、何等かの形で折り合いをつけることが、避けては通れない課題だったのである。

5. まとめ

戦前、カトリックの定訳とされていたラゲ訳以前に刊行された『聖福音書』が聖書翻訳史の中で語られることは少なく、また訳者である高橋五郎の名は『日本キリスト教歴史大辞典』には登場するものの『新カトリック大事典』には見当たらない。このように日本カトリック史上から忘れ去られた、あるいは抹殺された感のある高橋であるが『聖福音書』は大司教認可のもと初めて出版された日本語による四福音書完訳であること、プロテスタント訳にはなかった詳細な註釈を加えたこと、「神」を全編に用いたこと、高橋と聖書翻訳との関わり、そして刊行当時のカトリック教会およびパリ外国宣教会が置かれた状況など、それをめぐってはさまざまな歴史的背景があり興味が尽きない。高橋の訳業と註釈は、明治元訳から大正改訳にいたるまでの過程にあった聖書翻訳の試みの一つとして、また、日本人が外国人宣教師の指導下を離れ独自の聖書研究の成果をそれなりに反映させた業績の中では最も初期の一例として、特筆に値するものであろう。

日本のカトリック教会では中国にならい、明治以降一般的には第二次大戦後まで「天主」を使用していた。しかし、教理書以外の教会の出版物や一般信徒向けの雑誌『声』に掲載された記事からは「神」の使用がプロテスタント明治元訳完成後から少しずつ見られ、高橋訳『聖福音書』からラゲ訳までの間、1900年代に「神」と「天主」の混用が徐々に進んだこ

⁷⁷ 『パリ外国宣教会年次報告IV（1912～1925）』松村菅和・女子カルメル修道会訳、聖母の騎士社（1999）31ページ。

とが見て取れる。古くは 16 世紀の羅葡日辞書にデウスの訳語のひとつとして登場する「天主」は、神道とは関わりのない語彙であり、日本の神々とキリスト教の神との間にはっきりと一線を画する意味では有益な訳語であったと言える。しかし、1890 年代以降、天皇＝国体とその源泉としての「カミ」が絶対化され、そしてそれが愛国心と結合した言説が強制されるにつれて、神・カミと神・デウスをどう考えるのかということはプロテスタントのみならず、カトリック信徒にとっても重要な信仰上の課題となっていた。キリスト教と愛国心に関しては、近年、内村鑑三をはじめとして明治のプロテスタント思想家についての研究の進展がめざましいが、今後、カトリックおよび正教会関係者についても同様の進展を期待したい。

(ひおき・なおこ 名古屋学院大学 非常勤講師、南山宗教文化研究所 非常勤研究員)